

日本社会文学会一編

文学

と

植民地

オリジン出版センター

植民地と文学

オリジン出版センター

植民地と文学

1993年5月10日 発行

編 者 日本社会文学会編

発行者 武内 辰郎

発行所 (株)オリジン出版センター
東京都新宿区岩戸町16 メジャー神楽坂402
電 話 (03)3260-0453
FAX (03)3267-8697

装 幀 ローテ・リニエ

印 刷 K M S

落丁本・乱丁本はお取り替えます

ISBN4-7564-0170-8

はじめに

私達は、これまで近代日本史を大体において日本の立場あるいは日本の視点からのみ見がちだった。しかし、それによって近代日本史を本当の姿で描き出すことができただろうか、あるいはできるだろうか。

振り返って見れば、一八六八年革命が起きたのも西欧帝国主義による植民地化の危機から日本を守ろうとする先覚者たちの意志だった。日本国内の情勢に対する考察だけでは、近代日本の幕開けである一八六八年革命でさえ、その本当の姿を描き出すことはできないだろう。地球的な視野が必要だ。

六八年革命によって近代社会に突入した日本は、国力をつけると、次々に対外侵略戦争をはじめた。日清戦争、北清事変、日露戦争、シベリア出兵、満州事変、日中戦争、東南アジア・太平洋戦争。これらの戦争を通じて日本はまず台湾を取り、樺太南半分を取り、朝鮮を取り、「満州」（中国東北地方）を取り、また「満州」以外の中国にも攻め込み、さらには東南アジアの国々や太平洋の諸地域にも軍隊を進め植民地にした。近代日本の足跡を本当の姿で描き出すためには、もとより地球的視野が必要だが、何よりもアジア・太平洋地域の近代史のひとつとして視ることが必要であるといわざるを得ない。今、見たように、日本は、これらの国々や地域と、単に一応の隣人として

の關係を結んだのではないからだ。

昨年末、海路でカンボジアを訪れ、コンボンソム港に着いたが、周囲は椰子の葉を葺いた粗末な小屋が散在する荒地だった。文明の利器としてはHONDAのバイクだけが数台、私達を待っていたのには驚いた。その後、訪れたプノンペンもホーチミン市も、そしてジャカルタも日本車や日本企業の広告で溢れていた。現在の日本についても、その本当の姿を描き出すには、少なくともアジア・太平洋地域の人々の視角が前提されなければならないのは、言わずもがなのことだ。

当然のことながら、このことは、近代日本文学史についても当てはまることだ。これまで私達の近代日本文学の歴史に対する見方は、あまりにも内向けだった。もちろん、それは研究者だけの問題ではない。戦後文学、さらには現代文学も、その宿癖から自由とはいえない。そこに登場するヒーローやヒロインたちは、そのほとんどが被害者意識の持ち主だ。

本書は、日本社会文学会が以上のような考えの上に立って一九九一年五月以降、単独あるいは共催で開いた三つの国際シンポジウムあるいは懇談会の記録を収めたものだ。

①日ソシンポジウム《シベリア——出兵と抑留》 一九九一年五月二六日午後一時から、新潟市新潟厚生年金会館

②日朝文学懇談会《日本の植民地的支配と朝鮮》 一九九二年八月二一日午前九時から、朝鮮民主主義人民共和国平壤市チュチェ科学院

③日中シンポジウム《日本帝国主義と「満州国」の文化》 一九九二年八月二九日午前八時四五

分から翌日正午過ぎまで、中華人民共和国長春市南湖賓館

後二者は私達が向こうに出向いて行なったシンポジウムだ。社会文学会が近代文学史の客観的な叙述を求めて最初に企てた国際シンポジウムは、一九八九年一月、中国・ソ連・モンゴル等から作家や学者を招いて長崎で開いた《核と文学——アジアから見たナガサキ》である。これは今、その速記録の抜粋が副題の「アジアから見たナガサキ」のタイトルで岩波ブックレットに収められている。また社会文学会では、一九九一年一月には、アジア・太平洋の一一の国や地域から同じく作家や研究者を招いて沖縄で国際シンポジウム《占領と文学》を開いている。これも近い内にオリジン出版センターから一冊の本になる予定だ。

なお、来る七月四日には川崎市で第二回日中シンポジウム《近代日本と「満州」》が東北淪陥一四年史編纂委員会の代表を迎えて開催されることになっている。「東北淪陥」というのは、中国の東北地方が日本帝国主義によってドン底に落とされたという意味で、「一四年」というのも正確な数え方で、私達是一般に「一五年戦争」と切りのいいように言い習わしているが、正確だけに重みを感じる。

第三部中の「東北淪陥期の新聞事業」と「日本帝国主義の科学技術侵略」は当日、提出されたが報告されなかったもの。しかし興味深いので収録した。

本書の表記だが、例えば「満洲」を「満州」、「聯合」を「連合」というふうに、多く現代的に統一した。

最後に新潟シンポジウムの開催については特に中島欣也、新潟中央銀行頭取の大森龍太郎、新潟臨海陸運送会社社長の高橋伝一郎、衆議院議員の関山信之、新潟大学の多賀秀敏各氏のお世話になった。また県立水原高校の鈴木章吾氏をはじめ、新潟県内会員の日夜を分かたぬ活動がなかったら新潟シンポジウムは開催不可能だった。

日朝文学懇談会の開催については、朝鮮社会科学者協会の黄長燁委員長、朝鮮総連国際局の李達国氏のお世話になった。また本書の作成にあたって法政大学西田研究室の谷本澄子さんをはじめ野水まゆみ・佐藤信二両君らの協力をえた。深く感謝の意を表したい。

一九九三年三月

日本社会文学会代表理事

西田 勝

植民地と文学——目次

まえがき

第一部 シベリア——出兵と抑留

「環日本海時代」へ（開会の挨拶）	中島欣也	11
二葉亭四迷の意志を継いで（座長挨拶）	西田勝	13
抑留生活四年（証言）	近藤次郎	16
父の眠る丘（証言）	松島トモ子	20
ペレストロイカの中で	下斗米伸夫	24
シベリア出兵と朝鮮	高橋治	30
日本人捕虜の埋葬地	イーゴリ・マズロフ	38
日本文学に現われたシベリア出兵	大和田茂	42
スターリニズムと抑留	ミハイル・スベタチェフ	47
国防史における暗黒の頁	芳井研一	53
パネリストの補足発言と討論 抜粹		57
「小さなロシアのマダム」（証言）	ニネーリ・バランデューク	63

第二部 日本の植民地支配と朝鮮文学

開会の挨拶——社会文学会とは？……………	西田勝……………	69
国木田独歩の見た朝鮮——忘れ得ぬ人びと……………	芦谷信和……………	73
横村浩の『間島バルチザンの歌』——プロレタリア国際主義と連帯……………	猪野睦……………	82
中島敦と朝鮮——京城の「ヨボさん」への連帯……………	浦田義和……………	88
日帝下のソウルにおける文学活動——親日派と田中英光……………	川村湊……………	91
日本の植民地支配と朝鮮文学の発展——歌謡・民謡的作品……………	キム・ハミョン……………	98
従軍慰安婦と《金日成花》……………	チエ・オンギョン……………	106
現代朝鮮文学の母胎——抗日革命文学……………	キム・ホーチヨル……………	108

第三部 日本帝国主義と「満州国」の文化

〈第一日〉

開会の挨拶（中国）——新しい情報と熱い友情……………	王承礼……………	113
（日本）——中国女性の靴一足……………	西田勝……………	115

東北淪陷一四年史研究と中日友好……………王承礼……………121

「満州文学」研究の現状……………川村湊……………129

東北淪陷期における抗日思想文化闘争……………呂元明……………135

広津和郎と「満州」……………寺田清市……………148

東北郷土文学の主張とその特徴……………梁山丁……………154

歴史のこだま——東北淪陷期の音楽……………韓岡覚・呂金藻・馮伯陽……………161

梁山丁とその抗日文学作品……………馮為群……………174

東北淪陷期の新聞事業……………張貴……………188

日本帝国主義の科学技術侵略……………李茂傑……………200

〈第二目〉

日本近代史にとつての「満州」……………大江志乃夫……………215

李季瘋とその『雑感の感』……………李春燕……………225

長野県と「満州国」……………上條宏之……………234

日本のプロレタリア文学が描いた「満州」……………布野栄一……………254

結語——日本文化の貧しさ……………西田勝……………267

第一部

シベリア——出兵と抑留

日ソ文学シンポジウム

（一九九一年五月二六日午後一時～六時、新潟市・新潟厚生年金会館）

パネリスト紹介 1

(発言順)

中島欣也 作家。1922年生まれ。陸軍航空士官学校卒業。『愛憎河井継之助』『幕吏松田伝十郎のカラフト体験』『破帽と軍帽』ほか。

西田 勝 文芸評論家・法政大学教授・非核ネットワーク世話人。1928年生まれ。東京大学文学部卒業。『社会としての自分』、『近代文学閑談』、『田岡嶺雲全集』（編）ほか。

近藤次郎 新潟県吉田町町会議員。1925年生まれ。新潟県鉄道教習所。『望郷五〇〇〇キロ』。

松島トモ子 歌手・タレント。大東学園高校卒業。『ニューヨークひとりぼっち』、『ともだちの詩』。

下斗米伸夫 法政大学教授。ロシア政治・ロシア史専攻。1948年生まれ。東京大学大学院博士課程修了。『ゴルバチョフの時代』、『ペレストロイカを越えて——ゴルバチョフの革命』ほか。

高橋 治 作家。1929年生まれ。東京大学文学部卒業。『派兵』4巻・『秘伝』・『風の盆恋歌』ほか。

イーゴリ・マズロフ 歴史学者・ハバロフスク教育大学講師・日本史専攻。1950年生まれ。

大和田茂 都立城北高校教諭。1950年生まれ。法政大学大学院日本文学専攻博士課程中退。『社会文学・1920年前後』、『戦争と文学者』（共著）ほか。

ミハイル・スペタチェフ 歴史学博士・ハバロフスク教育大学教授・ロシア国内戦争関係専門。1930年生まれ。

芳井研一 新潟大学教授。日本近世・近代史専攻。1948年生まれ。一ツ橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。『一五年戦争・第一巻』、『日本議会史録』（共著）ほか。

ニネーリ・バランデューク 国家保険局従業員。1932年生まれ。

「環日本海時代」へ（開会の挨拶）

中島 欣也

（シンポジウム実行委員長）

今日はお天気の悪い中を、皆さんよくいらっしやいました。ありがとうございます。

シベリア抑留に関しましては、私達の身近に多くの関係者がおいでになり、いわば「涙の記憶」として、あまりに生々しい問題でございます。それを取り上げるといふことは、ソ連側にとつては、ぜひ取り上げてほしいという内容ではないのではないか、と思います。シベリア抑留の経験は私達の記憶のなかに、まだ強烈に残っておりますから、日本は、ソ連に対して常に正しかったのに、と思いがちですが、それは本当だったのでしょうか。

歴史を検証いたしますと、日本もソ連に対して、過去、いろいろなことをしてきております。「シベリア出兵」はその最たるものでございます。一九一八年から二三年まで、日本はシベリアに軍隊を出しまして、シベリア鉄道沿線のほぼ主要な都市を占領します。それから、いわゆる尼港事件というのが起きまして、それをきっかけに、北樺太も占領してしまいます。出兵のはじめには、他の国々との共同出兵という大義名分らしきものもありましたが、後になって他の国々が引きあげても、日本だけが居すわりまして、世界各国から非難を浴びるということがありました。当時国内でも、十数年前の日露戦争の時は、熱狂して軍隊を送り出した国民が、そっぽを向くということもありま

して、何らなすところなく撤退をしました。つまりシベリア出兵は、ロシア革命に対する干渉と、北満州やシベリアにおける日本の勢力拡大ということが根本目的になっていたわけでした、ソ連側にとっての「抑留」と同様、日本にとっても、ぜひ取り上げてほしいようなテーマではないと思います。このように、日ソ両国にとって、あまり好ましくない、いわば「負の要素」を持ったテーマを、あえて取り上げてシンポジウムを行うということは、日本にとってもソ連にとっても初めての試みではないかと思っています。

ではなぜ、このようなことをするのか。それは、私は、日ソ両国が本当の意味でのお付き合いをするためであると考えております。本当のお付き合いとは、こういうものでありまして、キレイごとだけを並べて相手を非難するというのでは、論議は不毛であります。そうではなく、お互いに不都合といつていい事実をさらけ出して、いいことばかりをしてきたわけではない、お互いに悲しい人間であるという共通の認識と理解に立つてこそ本当のお付き合い、つまり交流が可能であると私は考えております。「環日本海時代」ということも、こういう土壌がありませんと、本物にならないと私は思っております。

また、このシンポジウムがほかでもない新潟で行われるということに、私は大きな意義があると感じております。新潟は、シベリア出兵の時に、日本軍の将兵を送り出した港の一つでありました。そして、現在は、「環日本海時代」を開く日本の玄関口の一つでございます。そのような意味でも、この新潟で、このような画期的なシンポジウムが開かれるということは、私にとりましても深い感

概を禁じ得ないことでございます。

どうか、本日は皆様も最後まで御清聴下さいますようお願い申し上げます。

二葉亭四迷の意志を継いで（座長挨拶）

西田 勝

私は、主催者の日本社会文学会の代表世話人としておりますので、まず日本社会文学会の紹介と、このシンポジウムを開催するに至った経過とを簡単にお話したいと思います。

日本社会文学会は、一九八五年五月、文学と社会問題との関係を共同研究する機関として生まれ、いわば新興の学会であります。学会設立の動機は、一つには現代日本の文学が、私の中に閉じこもって、次第に衰弱するということが起きております。また他方では、視聴覚文化というものが、つまりラジオとかテレビとかというものが深く社会に浸透いたしましたして、文学を読む層が少なくなっている。それらに対する反省から、一つには社会問題というものを真正面から取り上げていく。二つには、もう一度、「文字によって書かれたものは、すべて文学」という文学の原点に戻って考えてみよう、というわけで、日本社会文学会が創立されました。

実際、日本で美文学、なかでも小説が文学の王座になったのは日露戦争の頃で、日清戦争の頃は順位が今と全く逆で、史伝・批評・詩歌・戯曲・小説の順位になっておりました。

そういうわけで、私達の会には、文学の研究者だけではなく、住井すゑ・小田実・李恢成・松下

竜一のような作家は当然として、色川大吉・大江志乃夫といった歴史家、変わったところでは、本島等・長崎市長のような人々も入会しております。

グローバル・ローリズムの原理

日本社会文学会のよって立っている、もう一つの原理は、グローバル・ローリズムというもので、これまでの学会というものは、だいたい中央でもできることを、観光というものを付加価値として、地方で持つということが多いんですが、日本社会文学会は、地域の文化の見直し、振興ということを大きな目的としております。今回も昨日は新潟出身の作家や詩人を取り上げて、勉強会を行いました。同時に、その地域の持っている国際性、いや地球性というものにも注目して、一九八九年秋の長崎研究大会では中国、ソ連、モンゴル等から作家や学者を招きまして、「核と文学——アジアから見たナガサキ」というテーマで国際シンポジウムを開きました。そして、そこで明らかになったのは、私達日本人が、原爆については被害者だが、アジアの人々に対しては加害者であり、その行き着いたさきに原爆があった、ということでした。一五年間に及ぶアジア・太平洋戦争で死んだ日本人の死者は三百万余ですが、アジア・太平洋地域で日本人によって殺された人は二千万にも及んでいます。今後、日本がアジア・太平洋地域に住む人々と平和的に共生していくためには、この被害・加害の問題をはっきりさせる必要がある。そこで、そういう究明を、新潟なので、日ソの間で深めていこうというので、今回のシンポジウムになったわけであります。